

新東海道五十三次



武田泰淳

中央公論社

武田泰淳

中央公論社

新東海道五十三次

新・東海道五十三次

©1969 検印廃止 定価460円

昭和44年9月3日 初版印刷

昭和44年9月13日 初版発行

著者 武田泰淳 発行者 山越 豊 印刷所 三陽社

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京34番

目次

出 発 準 備

3

品川―鮫洲―泉岳寺

13

川崎大師―鈴ヶ森―横浜―追浜

27

鎌倉―江の島―茅ヶ崎―国府津―富水―箱根

45

遊行寺―三島大社―千本松原―三津浜―富士市

64

水口屋―清見寺―坐漁荘―新居の関―丸子―久能山―日本平

85

登呂―三保の松原―浜松―姫街道―館山寺

106

三ヶ日―豊田―犬山モンキーセンター―明治村―蒲郡

119

本部田―知多半島―渥美半島―名古屋

138

長島温泉―専修寺―鈴の屋―伊賀上野―伊勢神宮

159

三井寺―琵琶湖文化館―石山寺―琵琶湖一周

179

到着したけれども

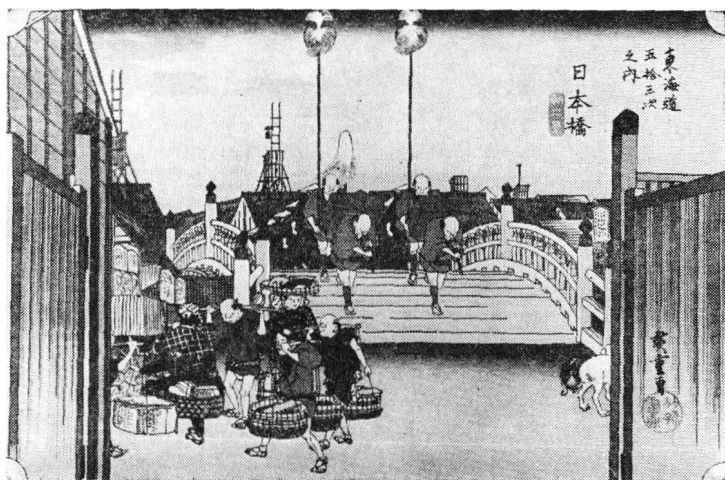
192

あとがき

203

新・東海道絵地図

新・東海道五十三次



日本橋 広重「東海道五十三次」より

出発準備

男がしっかりとハンドルをにぎり、女性がやさしく寄りそうようにして、助手席に坐っている。

それでこそ、男性のたのもしさ、それに協力するオナナの可愛らしさが感得できるのである。

私どものように、走らせたり乗せたりする厳然たる指導者は妻であり、ただただ走らせてもらい乗せてもらいう手も足も出ない同乗者が夫である場合、男女の地位はさかさまになり、世の秩序は乱れてくるのではあるまいか。

女性ドライバアなるものが、私はきらいであった。急に偉くなったような顔つきで、ぼくら通行人をバカにして突進してくる、その特権の乱用ぶりこそ、にくらしきものであった。タクシイやトラックの運ちゃん、あれは職業だから仕方ないとして、彼女たちの、あのおすま

しの、ひとりよがりの、うすい鉄板の「お城」の中にふんぞりかえった「お姿」こそ、許しがたきものと思われた。足の不自由な夫を援助するため、免許証をもらって送り迎えする、けなげな妻の話もきかされたけれども、イカしたようなかっこう（そんなのはイカでもスルメでもありはしないのだが）で、上流階級ぶって（もしも自分で自分の車をうごかすのが上流だとしたら、荷車を引くおかみさんの方がもっと直接的に上流だ）、いかにもサッソウと（ところが実はエンジンのはたらきが完全なだけなのに）走りすぎてゆく特殊婦人たちを眺めるたび、人間はかくまで自己反省のない心理状態に満足できるものかと、うたた感慨にふけたものであった。

ところが、一たん車を所有し、車を駆使し、車のありがたみにドブリと漬かってしまうと、しかも女房運転手に万事おまかせしてしまうと、私のかつての反感や「正義心」は次第に消え行くのであった。まことに恥ずかしいこと、情けないことのきわみであるが、いつのまにかマイカア族の一員として、外出するとは助手席に坐ることとなりと考える習慣がついてしまったのである。

そもそも、第一次戦後派とよばれる文学グループが、

めいめい小説家として出発したさい、一人だって、まさか自分が、ガンリン（ハイオクタンにしろ、普通ガソリンにしろ、とにかく神秘的な液体）を燃料として走る快適なるクルマを買うであろうとは、夢想だにしなかったにちがいない。身ぶるいするほどの貧乏、明日をも知れぬ混乱、道路標識も交通規制もスピード制限もアカとミドリの信号もあったものでない極限状況こそ、われらの作品の生みの親であったのだから、快適なるクルマ、完全なるノリモノこそ「敵」であるはずであった。

戦後派仲間で、一ばん早くこの世におさらばした梅崎春生は、奥さんに免許証をとらせたけれども、ついに車を買わずに（買えずに）、「幻化」の如くアッサリ消えてしまった。ついに買わなかった彼のために、モト坊主の私は、戒名をこしらえた。曰く。「春秋院幻化転生愛恵居士」。「恵」とは、未亡人の名である。もしも彼が転生したら、戒名の義理があるから、うちと同じカタの車を買うであらう。

十七年前、私の妻ユリ子は、古い師に運勢を見てもらった。「健康体ですな。もしも交通事故で死ななかつたら、たぶんながいきてできるでしょう」

クルマどころか靴も買えない貧乏時代だから、気にもとめなかった。ただし、ユリ子は階段からころげおちるくせがあった。駅のコンクリート階段から、ホームにころげおちる。下宿の三階の屋根裏部屋からも、まっくらな急な階段（あまり急なので綱にすがって降りる）を落下して、両脚で階下の壁をつきやぶったこともある。ついこのあいだも、アパートの入口で、大きな犬ににらまれて、恐怖のあまりころげおちた。街頭で自分勝手にころげおちるのは、クルマとは無関係でも、やはり交通事故の一種かも知れない。クルマごところげおちるとしたら、それこそ模範的事故である。

「健康体ですな」の予言は、まさに的中した。そのおかげで私もどうやら生きのびられた。だが予言の後半、「もしも」から後の部分は結局、「いくら丈夫そうなんだでも、交通事故にはかないませんぞ」というおどかし文句である。

同棲したてのころは、夫婦そろってカストリ焼酎など愛飲していたから、ただ歩いているだけで、ドブ川とか踏切とか、道路工事の穴とかで永遠の睡りに入る可能性はいくらもあった。個人的交通事故など、誰も問題にし

てはいなかった。「あいつ、赤羽の駅から崖下へおっちちて、眼と耳から血を流して、グウグウいびきをかいて、まる二日生きていてから死んじまったよ」「ああ、そう」「あいつ、友達のおつやに行った帰りに、川の上の線路を歩いて死んだらしいよ。ちっぽけな水たまりだけだなあ。どうして、あんな所で死ねたんだろう」「ああ、そう」

私自身、雪の夜、神田の裏街のゴミ箱の上にまたがって反抗的に泣きさわいでいるユリ子をひきずり下ろし、あまり洗ったことのなさそうな髪の毛をひきずり、豚のモツのごった煮を、胃からもどして、白い雪をけがして歩きつづけたくらいだから、自動車など少しもこわくありはしなかった。

そのころでも、たしかに車は走っていた。だがそれは、税金が払えないで（一家心中までした正直者がいる）、やけになってる商店から家財家具をそっくり取立て、それを見せしめ、見せびらかしとして走るオカミの車。あるいは、ヤミ商売でさかえている飲食店（と言っても、アンコものやアルコール物のわずかな稼ぎなのであるが）を急襲して、戦利品を満載してひきあげる警官用の

クルマ。

外国人、ことに色の白い（これには黒いのもまじっている）外国人は、なにしろ権力者、支配者なのであるから、小ジープか大ジープか、ピカピカ光る高級乗用車に乗って、野暮なる垢まみれの東京都民をあわれむかの如く、血色よく肥太って走り去って行くのであった。十一文半の大靴をはく大男（と新聞はひかえ目に表現していた）がのしあるくストリートで、日本人は交通事故さえ自由にひきおこすことができなかった。

買うつもりなど、全くなかったのだから、買ってからどうなるという予想もありうるはずがなかった。

杉並区上高井戸の公団住宅は、陽あたりも風とおしもよろしくて、夜おそくまで騒いでいると叱られる以外、文句のつけどころがなかった。それが私たちの棟に密着してパン工場が建てられ、パン釜の鉄蓋、どんなものか実物は知らないがそのフタをあけたり締めたりするのが、午前四時ごろから開始される。ふくよかな焼きたてパンの匂いは、あれは食卓に少量ずつ盛られてあるからいいので、全工場が発散するニオイはむしろ臭気と申すべきで、早起きの私には脅威となった。アンコや赤飯やカレ

エ汁入りのパンまで製作するから、複雑におびやかされる。元気のいいパン製造青年は、屋上から剣術やら体操やらの掛声をきかせるし、おちおち仕事ができないので港区赤坂のコーポラスに引越した。

もしもその引越しさえしなければ、身のほど知らずの買物はしないですんだかも知れない。と言うのは、暖房とエレベエタアの設備こそないが、この古アパートは、私の借りるさい駐車場の一角を提供してくれたからである。三十三号の借主が、その一角を保有していたため、私にもその権利がひとりでに付いてしまったのだ。ワサビはあれども、サシミがない。車がないのに、三十三号の部分だけ、駐車場は空いていることとなった。

赤坂あたりで一ヶ月の駐車料金は、どれほどするか。くわしくは知らないが、マイカー族にとってはよだれがたれそうな好条件である。

「どうしても買わないとダメよ。みなさん、車もないのに権利だけもってるのけしからんと怒っているもの。あけとくなら、こっちへ寄せと、みなさん理事会のとき主張してるもの」

都心のコーポラスに居住することさえ、贅沢すぎると

尻ごみしていた私が、さらにクルマを買う？ 私のゼイタクぎらいは何も道徳心によるものではなくて、金が出ればそれだけ原稿をたくさん書かねばならぬ、その労苦をおそれるからにすぎない。

できるだけ人に好かれようとする、いざこざは一切避けるために万事に気がねする。不必要なほど用心ぶかくするという習性。そのため、車を持つことを遠慮したかった。こんな場合、何より簡単な解決方法は「コレはおれが買うんじゃない。おれはちっとも欲しがってなんかいやしない。女房が買ったがって、女房が買うんだ」と、責任をユリ子におっかぶせて、自分はおとなしく運命にしたがったただだと自分自身に想いこませることであつた。

私は恥ずかしかった。と言うのは、買うという行為にずるずるひきこまれることよりは、むしろ車一台買うにも何とか理くつをくつつけて、言いわけ、言いのがれを工夫する性格が恥ずかしかったのである。(そして今、この文章を書きながらも、恥ずかしさを売物にしているのではないかという反省が、みじめたらしくてイヤなのであるが)

中目黒のガスタンクの下、寺の留守番をしていたころ、毎朝はやく、女房が外出する。行先を告げずに出かけるのは、おたがいさまだだったので、たずねることはしなかった。

神経質のヤキモチと思われたくないためでもあった。寺には住職も女中さんもないから、朝食も幼児の世話も、彼女をあてにしないでよかったし、料理もろくにできないで、カツレツをつくるのに台所を粉だらけにして数時間かかってでも完成しないくらいだから、居なくてもさしつかえなかった。

それにしても毎朝とは熱心すぎると、不思議には思っていた。免許証をもらうため、練習所がよいをしていたのである。

なにしろ、一寸先は闇で、未来のことなどあまり考えず「わたし、尼さんにされるんじゃないかしら」と、寺すまいを経験したばかりのユリ子はわが身の行く末を案じていた。「わたしのあたま、丸くないからな。ハチ型だから、どうかしら。だけど、わたし可愛い顔してるから、尼さんになれば、きっと人気が出るわ」

父の死後、遺言に名を記された父の弟子（私の従兄）

に、私は寺を譲りわたした。新住職は福島県の会津に別
に寺をもっていたので、不在がちである。私は私で寺の
事務などはほったらかしにしているので、自然、ユリ子
が檀家の応対をひきうけることがある。

世間のうわさを気にする私とちがい、彼女は、どんな
ウサが周囲で流れているか全くの無神経ですませるタ
チなので、本堂で好きなようにカネを鳴らしたり、木魚
をたたいたり、見よう見まねで塔婆まで自分で書いてし
まう。キリスト教徒が埋骨をたのんできたときは、塔婆
の上部に苦心して十字架まで装飾的に描いたのであった。
「お経だけはよむなよ」と私がいましめても「だって、
わたし、女学校のとき般若心経はんにやしんぎょうを読まされておぼえてる
から読めるわよ」と、自信まんまんである。「お寺って、
いいなあ。相続税もかからないんでしょ。恵まれてるわ
あ。こんないい話であるかしら」

宗教と経済の矛盾、それが解決できないため、私は坊
主廃業を決心していた。愛する女性が坊主の妻であるこ
とに、私はたえがたかった。さんさん父に迷惑をかけ、
何回も警察につかまって、あの寺の息子はアカでどうし

ようもないと隣所でうわさされ、そのアカでありつづ
けることもできずに、戦後は不良文士の仲間入りしてい
るらしい私が、大寺にふさわしくないあばずれ女とくっ
ついて、その女が今や、どさくさまぎれに寺の実権をに
ぎろうとしている。

「あの娘、元気がよくていいけど、一寸ヘンなところがあるね。どこか少し、おかしいよ」と、母はそれとなく批判する。「あのひとお母さんに早く死に別れたといから、家庭教育を受けていないらしいね」

「わたし、寝ているあいだに髪の毛を剃られちゃうんじゃないかと、それだけが心配よ」と、ユリ子は、くさったクサヤの干物を食べてはれあがった顔で、つぶやく。
「大型の二種免をもらったわ。これならトラックだって運転できる」

毎朝の無断外出の原因が、それだったのかと知って安心したし、天にも昇らんばかりのはれぱれとうれしげな表情を眺めて、私もうれしかった。

「おっかないわよう。大男の紳士だって係りの人に叱られて泣きそうになってるの。わざと小さな声で名を呼ぶから、きこえないで黙っていると『ツンボかア』と怒ら

れるし。だけど、もらったときは生まれてからはじめて、入学試験にうかったより何よりうれしいわよう」。極楽か天国をこの眼でたしかめてきたように、うっとり興奮しているのは、お茶、お花、おどりの名取りでもなし、女子大文学部やコンピュタアのキイバンチャの特殊免状ももっていない彼女が、これでやっと一人前に腕に職がついたという絶大の喜びのあらわれであつたらう。

「そうかい。よかったなあ。それじゃ、おれが死んだらどこかの出版社か新聞社に運転手にやとってもらえよ。おれからも頼んでおいてやるから」

私は、女にかせがせて暮らしている、いわゆる「髪結いの亭主」にはなりたくなかった。法然上人の他力本願の浄土教を信じ、おとなしやかな人間平等論が好きではあっても、女性にもたれかかり女性のおこぼれをちょうだいして、いっぱしの色男ぶっている奴だけは軽蔑していた。

だが、「免許証バンザイ」の感激に酔いしれている彼女をばげましているうちに、あさましきかぎりではあるが、私は、老衰して小説も書けなくなり、病床で不平不満だけをかかえて横たわっている私が、もしかしたら大

型トラックを運転する彼女の助けによって、生きながらえることも有るかも知れぬという、不吉な予感におそわれたのであった。

杉並区上高井戸の公団アパートに移っても、乗るクルマがなかった。わが一家は毎年、夏になると、信州の山奥の温泉、三食つき七百円の旅館ですぐすことにしていた。先着して必死に書けない原稿に智慧をしぼっている私のあとから、お寺のお施餓鬼の手つたいをすませた彼女が到着した。見ると片眼に眼帯をかけ、顔の半面が紫色にふくれ上がっていた。他人の車を借用して試乗しているうち、急ブレーキをかけて、ハンドルに顔の正面をぶつけたのである。

お化けみたいな顔になるくらいなら、免許など取らない方がよかったのにと、私はばかばかしくなった。しかし、安部公房君の夫妻が軽井沢から私の宿まで新車を走らせて来たときには、愛車を所有して一家三人で自由に訪問できる彼がうらやましかった。私にくらべ原稿収入の多そうでもないのに、さっさと車を手に入れ乗りまわしている安部君が、不案内の悪路の疲れを宿の湯で洗いおとしているのを見るにつけ、「ああ、新しい時代の新

しい作風の作家にはかなわんなあ」と感じ入ったけれども、どうせこっちは買わないのだからとあきらめて、さしてくやしきもなかった。

まっとうな四輪車を買えないので、女房は上高井戸の古道具屋で、おんぼろの古スクーターを買った。それを山の宿まで鉄道輸送して、川ぞいの石ころだらけの道を突っ走ることになった。しかし、スクーターなるもの、平坦な都会的道路をなめらかに走るものであって、原始野蠻のあらあらしき天然自然のミチにはふさわしくない。たちまち、かくれた凹みではねあがり、五メートルほど飛ばされて人事不省となった。桑畑でうめいているのを、養魚場ではたらいにいる農家の夫妻が発見し、たすけてくれた。ちょうど、その日は志賀高原の高級ホテルに宿泊している江藤淳君の夫妻が、私の宿を訪ねてくれる予定だったので、ユリ子は気がついたとたんに、またスクーターに打乗って、至急、宿へもどってきた。全身が、紫黒色のあざだらけで、足のはこびもおぼつかない。

しかし、英国紳士風の江藤淳と、フランス淑女風の奥さんが、わざわざ来てくれるのだから、傷などかまってははいられない。江藤君は「よた者におどかされないよう

に、黒眼鏡をかけてきました。ハハア、窓の外の芭蕉の葉はよろしいですな」と、おちつきはらっているし、繊細な奥さんは刺戟性の食物はうけつけないと言うので、カレイライスではまずいと思ったりして、ビール責めにしてごまかすことにした。

「オートバイやスクーターは、かこいがないからあぶないわ。かこいのある車の方が安全よ」という、女房の意見に私も賛成せざるを得なかった。

さて、かこいのある車ははたして安全であろうか。バックで車庫入れするさい、アパートの二本の門柱（カドのはっきりした四角のコンクリート柱）で、まず車の横ばらをこすった。人間の女性のお化粧は、はげても塗りなおしをすれば、三十分からずくに修理ができる。車のやわ肌のペンキ塗りに傷がつけば、色なおしがむずかしい。凹めば、なおさらむずかしい。車体に傷がつくのは、まだしものこと、通行人の胴体に接触したら、それではすまない。赤坂のT・B・S通で、ユリ子は、老人に接触して、彼をころがした。老人（男）はすぐ起きなおって、怒りもせずにはんやりと直立していた。職人仲間らしい若い連れが「今は大丈夫でも、あとが痛むぞ。少し

でも痛かったら、すぐ文句をつけろ」とすすめた。「痛くもなんともない」と、老職人はおだやかにしている。

ユリ子はしきりにあやまるが、少しもこちらを非難攻撃しようとしなない。「いいのかよ。行かれちまったら、おしまいだぞ。え？ 何とか怒鳴りつけてやったらどうなんだ。だまっているチはないぞ」。だが、老人はズボンの尻をなせているだけで、沈黙している。「申しわけありません」と、彼女はすばやく車を走らせた。「同乗していなくて良かった」と、無責任な私は只そののみ考えていた。「イエス・キリストみたいな御老人を車でころがしたら、このおれはどうなるんだ」

「京都まで自分の車で行きたいなあ。わたし、どうして行くわよ」と、彼女が決意を示すたびに、私は眉をしかめていた。車は三代目であるから、腕はたしかに上達している。しかし女性運転手、男性助手という関係は少しも変わっていないのである。

初代の車のころ、男性労働者を載せたトラックのすぐ後ろを走ると、いつも私は下うつむいて前方を見ないようにした。

「有閑階級の亭主が女房に車をあてがって、やにさがっ

ていやがらあ」。「見ろや。それが恥ずかしいから、あの男、こっちを向けないぜ」。ゴオ・ストップで車が動かなくなる。相手はそろって、こっちに注目し、ニヤニヤ笑っている。口笛を吹いたり、「ヨオッ」と声をかけたりする。その他、いろんな幻聴がきこえてくる。

幻聴や幻視ではなく、女房ひとりのときは、できるだけ女性のいやがる言葉で、からかってくる。時には、ズボンのボタンまではずして見せびらかすことがある。そんなときには、笑っても怒っても、また、すました顔つきをしても、どうしても具合がわるくなる。見つめるわけにはいかないし、さればと言って、横を向きでもしたら「効き目があつたぞ」と、ますます優秀な演技をやり出すからだ。しかも、工事現場か倉庫へいそぐ彼らのふざけたがる心理が、軍隊でトラック移動した体験のある私には、わかりすぎるほどわかるのだ。マイカー族と、そうでない族と二つに分かれているかぎり、さしたる悪意や反感はなくても、いやがらせの声や態度で、つもりつもった感情を吐出すのが、むしろ当然であろう。ジャリトラやダンブカアの運転手が睡眠不足と疲れて疾走中、その疾走をさまたげるような乗用車、しかも遊び半ぶん

のオンナなんかが生意気にもノロノロ運転していたら、怒鳴りつけたくなるのが人情であろう。そのオンナに甘ったれているいやな五十男！ ああ、どうして「彼」を罵倒せずにいられようか。

エロだかグロだか知らねえが、調子のいいこと書きまくって、労働の汗一つぶ流しもしねえで、上品紳士か高級ブンカ人みてえな面をしてからに「ボクは現代に絶望しています」なんて、ぬかしていやがるんだらう。さっさと正面衝突か追トツか、三重五重ショウトツでもして、くたばっちまうがいいや。しかも、モト坊主だとか言うじゃねえか。それで、おシヤカ様に顔向けできるのかよ。おシヤカ様は、所有物はなにもかも棄てなさったんだぜ。何一つ他人に利益をあたえないで、排気ガスだ、警笛だ、道路をひとりじめにして、迷惑ばかりかけ、それで無事にすむと思っていやがるのかよ。

そんな声が、きこえてくる。

下品、低級、非紳士的な非文化人ではあっても、五十三次を牛にひかれて（女房はウシ年である）たどるとなれば、日本橋か東京タワーか宮城前か、毎日新聞社とかからか出発せねばならぬ。